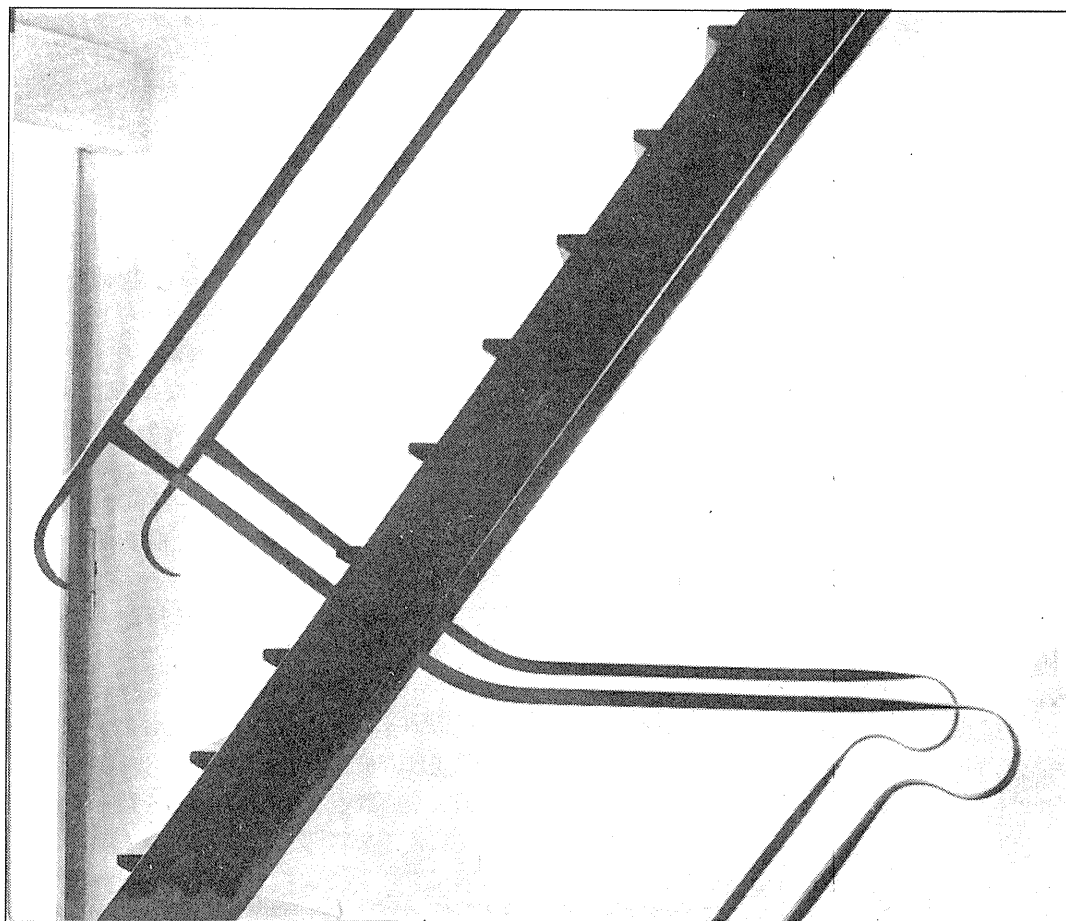


北里大学教養図書館

閲覧ニュース

42号

1984



偶 感

館 長 吾 妻 寛 治

新入生の皆さん、入学おめでとう。心からお祝い申し上げます。

苦しく味気ない受験勉強の明け暮れによりやく別れを告げ、遂にスクーリングの最終コースにたどり着いた今、皆さんは一体、どんな心境ですか。おそらく、暗く長いトンネルを通り抜けて、温かい日差し of 目的地に到着した思いでしょう。そして、只ひたすら解放感に浸り切っている人、やむなく押え続けてきた遊び心を発散させようと張り切っている人、これからの大学生活に不安と期待の入り交った気持ちを抱いている人など、皆さんはそれぞれの感慨にふけていることでしょう。

入学の感想を聞かれて、学生の一人が答えました。「高校までは、よく学び、よく遊ぶがモットーでした。大学に入った今はハムレットの心境、つまり、大いに学ぶべきか、大いに楽しむべきか、これが問題です。しかし、どちらに決めるにせよ、大ガク生に変わりありませんから、わが道を行きます。」大学のレジャーランド化が話題になりつつあった頃でもあり、新入生を迎える度に、この駄洒落が思い起されるのです。ついでに申しますと、大学生の本分をなおざりにし、駄洒落の大楽生に徹した彼は、大学生としては泣きを見る羽目となり、今は手話落語で有名な師匠の弟子になっています。このケースは異常に過ぎますが、これに類似するものが少なくありません。願わくは、皆さんはハムレットの心境ではなく、無難な、もう一つのモットーに従って下さい。

さて、皆さんはまず、最初の一年間、教養部に籍を置きます。いわゆる教養課程であり、人文、社会、数学、理科、体育、語学の講義を受けます。このコースは、高校の延長と大

差なく興味が持てぬと不満を訴えられたり、専門学部からは無用の長物視され勝ちですが、いずれも皮相の見と言わざるを得ません。皆さんは今日まで勉強を続けてきましたが、学問がいかなるものか、考えることも、教えられることもなかったと思います。教養課程は、学問の本質なり、その研究の方法などを講義し、教授するのです。と同時に、実社会では各パートの指導者なり管理者の候補として迎えらるべき皆さんに相応しい人間形成の面も配慮されます。ある部門のエキスパートであると同時に、その部門の責任者ともなるべき皆さんは、それなりの識見を身につけねばなりません。かつて高校の延長云々と不満を訴えた学生諸君が、卒業後わざわざ相模原校舎に足を運び、前言を翻えて謝意を表わすのみか、教養部での不勉強を後悔することが少なくありません。これは、実社会が教養あるエキスパートを要望している明白な証拠と言えます。と同時に、教養部の一年は、皆さんの心掛け次第で、有意義な時間となり得ることを示唆しています。かかる現実を直視し、この社会要請に対応すべく、教養部は教授陣の強化や設備、特に図書館の整備に努力を重ねております。立場上、図書館につき一言申し上げます。図書館は、特に大学では、教授スタッフと同等の比重を持っております。図書館を見れば、その大学の全容が知れる、と申します。スペースが限定されておれば、収納されるものも自ら限られますが、教養図書館も厳しいこの制約を受けながら、堆い万卷が、皆さんの利用、活用を待っております。皆さんの望むもの、欲するものは必ず叶えてやれる自信はありますが、足らぬものもある筈ですから、遠慮なく申し出て下さい。そして、皆さんの不便、不満を、一つ一つ解消して行こうと考えています。時間的な余裕をお願いすることがありましたら、快く承知して下さい。図書館は、知の道場です。大いに、知との格闘に精出して下さい。

(ドイツ語)

モスクワ・キエフ

・ミュンヘン紀行

林 憲 二

1970年8月初旬のある日、羽田空港からヨーロッパに向けて飛び立った。主な留学先はドイツのマックス・プランク物理学・天体物理学研究所である。途中でキエフで開かれる高エネルギー物理学国際会議に参加する予定であった。

ここでは前半はモスクワとキエフに関する話、後半はミュンヘンを中心とした話を書いておこう。

殆んどの人がするように私も渡航準備を始めていた。旅券事務は新橋のI旅行代理店に頼んだ。ソ連の交通公社と異名をとる「インツーリスト」に私の旅程に関する一切の資料は通知されていた。

東京-モスクワ間は約11時間の飛行で、現地時間の午前10時にモスクワのシェレメチェヴォ国際空港に到着した。ここは都心から北西方向に約30km離れている。ちょうど成田国際空港と羽田空港の関係のように、キエフに行くには都心から東の方に約35km離れた所にあるブィコヴォ空港に行かなくてはならなかった。旨い具合にシェレメチェヴォ空港には「高エネルギー物理学国際会議」と書いた紙切れが貼ってあり、男が椅子に座っていた。暫らく様子をうかがっていたが意を決してロシア語で話しかけた。すると男は手を振って「英語、英語でいいよ」という。後でモスクワ大学の理学部の大学院学生と名乗った。

このあたりまでは予想通りであった。

私の話を聞くと、「どうぞ」と言ってすたすと歩き出した。仕方なくついて行くと、大きなバスが一台止まっている。運転手と何やら早口で話したあと、「これで行け」と言ってもと来た道に戻って行く。余分なことは一切

口にしない。つまり愛想がない。天候の話でもしたら気が落着いたのかも知れない。こちらとしては緊張しているのだ。

後で気がついたことであるが、この愛想がないという事実は(あるいは真実か)ヨーロッパ諸国に見られる一般的な現象である。パリ、ロンドン、ボン、アムステルダム、そしてマドリッド、殆んどみんな同じである。これは一体、何故だろう。不思議でならなかった。語学だけの問題ではなかった。

大きなバスに乘客は私一人。小一時間程走ったであろうか。運転手は黙って、降りろ、と合図をしている。「ここがブィコヴォ空港か」とロシア語でたずねると、頭をたてに振る。口をきかない。私は不安になった。空港のカウンターには人影はなかった。暫らくすると太った中年女性が現れて、手続をとってくれた。国内航空であるから荷物の重量の制限は30kgであると言って、私のカバンを軽々と、ひょいと持ち上げて重量測定器の上に乗せた。これは海外旅行用のカバンであり、その中には洋服類が沢山詰まっていた。約20kgはあった筈だ。この女性の力持ちには驚いた。後であちこちと旅行をしたがこんなのにはお目にかからない。なお、ソ連では多勢の女性が働いている。それも日本では肉体労働と呼ばれている職種にも進出している。キエフでは街で10人程の女性の配管工事に出会った。

キエフ行きの飛行機は午前11時50分発であるから暫く待てと言う。確かに私の切符は、前に書いたI旅行代理店が発行したものであるが、出発時刻は午前11時50分と書いてある。そうこうしている間に空港は混み始めた。キエフの国際会議に参加する人達がやってきたのである。先程の中年女性は各参加者のカバンを一つ一つ測るのが面倒になったのか、一度に5、6人のカバンを高々と積み上げて測るのである。

さて出発時刻がやってきたが何の知らせもない。知らせどころか、空港には事務員の人影が見当たらない。やっと空港の事務の采配を

ふるっていた中年女性が出てきた。返ってくる返事は「私の管轄している業務とは違うので分らない」というものであった。これは本当かも知れなかったが、もう少し何とかならないのかという気持ちを抱いていた。

そのうちに会議の参加者はどんどんあふれ出した。その中には日本からやってきた人達もいる。互いに切符を出して見せ合うと、みんな午前11時50分発となっていた。午後1時になったが、いぜんとして何の知らせもない。キエフに行く人はもうかれこれ1,000人くらいになっていた。これらの中にはのんびりと本を読んで時をかせいでいる人もいた。高エネルギー物理学の国際会議は翌朝、午前9時からキエフの十月文化宮殿で開かれることになっていた。どんどん時間が無意味に経過していった。

午後7時頃であったか、「飛行機が出る」と叫んで一群の人達が駆けて行く。私もついて行くが沢山の人達でどうにもならない。その内に中年女性の事務員が、これで満員です、と言って通路を閉ざした。次は何時に出るのか。飛行機はあるのか。返事はいつも同じ、「私は知らない」。丸で木で鼻をくくるとはこのことかといった風情である。

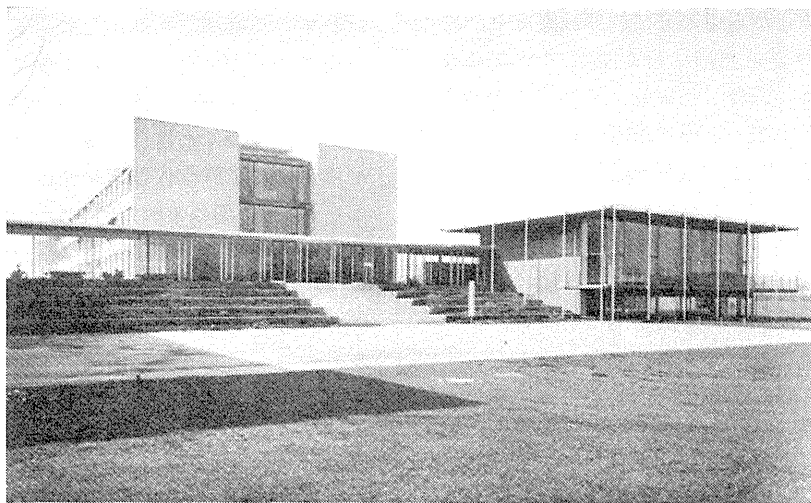
あちこちで雑談を交していた人達もさすがにくたびれたのか通路に座り込んでいた。次に飛行機が出るらしいと聞いたとき、反射的に走り出していた。旅行用のカバンのことなど念頭になかった。今度は旨く行った。機内の点検と称して武装した兵隊が数名、みんな顔をまじまじと（あるいはじろじろと）のぞきこむようにして歩き廻る。

思い出せばシェレメチェヴォ空港の警備もすごかった。特に入国事務を行っている場所には20名程の鉄砲を持った兵隊が配備されていた。必要があるからやっているのだろうが、あまり気持ちの良いものではない。

ようやく飛行機がタクシーを始めたのは午前3時頃であった。

空港側から見れば、キエフ行きの人達が沢山いる。それで通常便は取り止め、特別便を数機仕立てる。そんな対策があったのではないかな。

キエフ空港に到着したのは午前5時前後だったと記憶している。空港では参加者が多いので、クジ引きで宿を決めていた。私の宿は、かたわらの人によれば、キエフで「一番上等なホテル」だったらしい。もちろん東京ですでにホテルも予約済みであったが、その



マックス・プランク研究所(ミュンヘン)

ホテルとは違っていた。

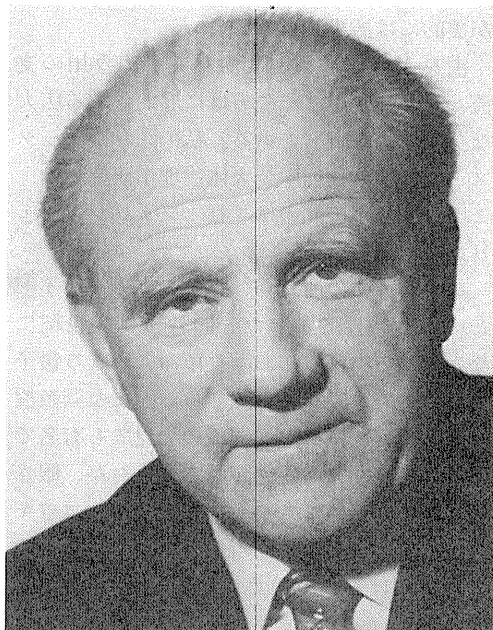
キエフは、ちょうど京都に似ていて、美しい街であった。モスクワの南西、約750kmの所に位置し、ドニエプル川の右岸に横たわっている。ウクライナ共和国の首都であり、人口ははっきり分らないが100万から150万の間らしい。中心街の道幅も充分広く、堂々としている。私のホテルはドニエプル川のすぐそばにあった。特に印象に残ったのは、キエフ空港と私のホテルをつないでいる道であった。夜中であつたから、バスの前方だけがライトでまぶしく照らされるのであるが、道のそばの林が、そして木が、うっそうとして深い緑を宿しているのがとても美しかった。

会場と私のホテルとは、歩いてほんの10分くらいの距離であつた。ここで約2週間、暮らした。色々な出来事があつたが、中でも思ひ出すのは次の「事件」である。

ある日、キエフ市の中心街を歩いていたときのことである。クレシチャーク通りからあまり離れていない小さな通りでA氏がカメラでパチパチと風景を写していた。暫くすると数人の男達がA氏を連行してゆく。これらの男達は、私服の刑事なのである。10時間も拘置されていた。どうやらスパイと間違えられたらしい。外部との連絡は取れないし一時はどうなるかと気が変になりそうであつた、と後で言っていた。結局、カメラのフィルムを没収されて釈放になった。

よく早朝に起きて近くの公園を散歩した。ホテルのすぐ前にウクライナ共和国の古文書博物館があり、その横を通れば公園に出る。この公園が格別気に入っていたのは、京都の嵐山の亀山公園と似ている点であつた。どちらも小高い丘陵地であり、上にのぼればすぐ下を流れる川が目に入った。もちろん公園の広さという点になると、この公園の方が亀山公園より数十倍広い。亀山公園から下を望むと保津川が見える。同じようにそこからはドニエプル川が見事に見えるのであつた。

とにかくブィコヴォ空港での「事件」は、



Heinz Heisenberg

ハイゼンベルク教授

一般に予定はくずれるから、会議に出るには時間的に余裕を持て、という平凡な教訓を残してくれた。

キエフを出発して、途中ウィーン空港に寄つた。ここでは空港の雰囲気さがぐっと軟らかになり、一種の陽気ささえただよっている。ウィーン人好みの「ゲミュートリッヒカイト」という言葉を想い出す。ミュンヘン空港は次の空港で、ここで降りた。

ソ連では(と言ってもキエフだけであるが)何かしら圧迫されたような気持ちであつた。空港での例の出来事以外にも、たとえば入国するとき持ち込んだお金を全部申告し、出国するとき精算するという手続にも、何かしらもう一つ好きになれないところがあつた。

ミュンヘンは、バイエルン州の首都である。人口は約150万くらいか。ミュンヘンの空港はリーム空港とも呼ばれていて、市の中心街から東方に約40km離れた所にある。空港から街への道路は、堅牢無比といった感じである

が美的にはあまり良くない。

街を南北に貫ぬいて流れるドナウ川の支流、イザール川とそのそばに展開される広大な英国公園が有名である。私の訪れたマックス・プランク物理学・天体物理学研究所は、この英国公園の北のはずれ、フェリンガー・リングにある。

この研究所の所長が、ウェルナー・ハイゼンベルク教授であった。同教授は今世紀になってから物理学におきた革命、つまり量子力学の基礎をつくった人である。また同教授の名をつけた不確定性関係の発見でも有名である。もう70才ちかい年齢であったが、眼光鋭く、かくしゃくたるものであった。コロキウムでもその発言は、現代の物理学の流行の先端に向けられていた。(写真を参考にして欲しい)。

到着して所長に面会したいと申し入れると、数週間待て、と秘書から言われた。随分沢山の物理学者達が待っているとのことだった。いよいよ面会日がきたので、会いにいった。おだやかな笑顔で机の向うから手を伸ばしている。握手がすむと早速、質問が待っている。ここでは物理学固有の問題には触れないでおこう。

アインシュタインの一般相対論に若干問題がある…と言って暫らく考えこんでおられたが、突然「ユカワとトモナガはどうしているか」と問う。先年、日本にやってきたとき京都大学で「現代物理学の諸問題」について講演されたが、当時、京都大学在学中の私もそれを聞いていた。その話をすると(黙って聞いているのがハイゼンベルク教授のくせなのであるが)感慨深げに遠くのものを見るような眼付をされた。

そもそも私の留学先がドイツのマックス・プランク物理学・天体物理学研究所に決められたのも、仁科科学記念財団と深い関係があった。仁科芳雄先生は日本の原子物理学の産みの親といっても差支えない。特に1928年、コンプトン散乱の有効断面積の式を(クライ

ンと共に)導いたので有名である。この財団は数年おきに物理学の素粒子の分野から1人選んで海外研究員として送り出していた。1969年には私が海外研究員として選ばれたのである。そして財団の理事長をされていたのが朝永先生であった。若いときやはりハイゼンベルク教授のところに留学されていた先生は、私に関する紹介状を同教授のもとに前もって送られていた。

第1回目の留学のとき、この研究所を中心にヨーロッパの大学や研究所などを多数訪れた。デンマークのニールス・ボーア研究所、パリのアンリ・ポアンカレ研究所、パリ大学など想いはつきない。

しかし紙数の関係で今回は始めの時期について書いた。いずれまたの機会もあろう。

最後に、ハイゼンベルク教授、湯川先生、そして朝永先生は、もはや地上ではお会いできない黄泉の人となられた。これらの人達には大変な、口ではとても表現できないほどのご恩をこうむった。いま考えて、どれくらいそれにむくいたか、はなはだ心もとない。

(物理学)



エクスカーシオン(1967)

ウィーン国立歌劇場と

『こうもり』

岡 野 安 洋

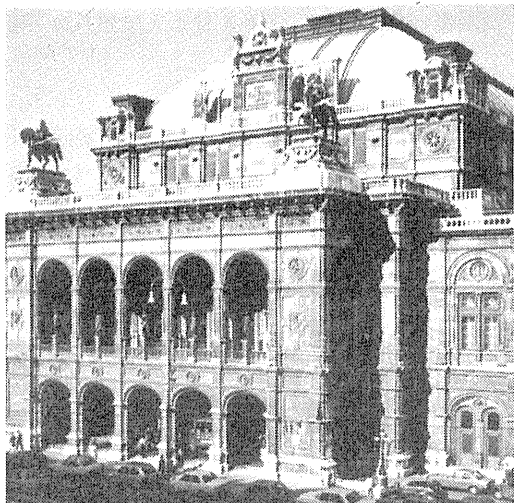
ウィーンの街はリング・シュトラッセという環状道路が中心となっている。それは市電に乗って一周してみると25分くらい、約4キロの変形した六角形である。19世紀半ばの都市拡張計画によって取り壊されるまでは、外敵の侵入を防ぐための城壁が築かれていた。しかし、19世紀半ばに至ってすでに無用の長物と化した城壁のかわりに、いくつかの大建築物が、シッカーツブルクとファン・デア・ニュールという二人の建築家によって建てられていった。そうした建物の一つが、1861年から8年間にわたる工事によって築かれた、ウィーン国立歌劇場である。そして、1869年5月、モーツァルトの『ドン・ジョバンニ』によって^{コケラ}柿落としをされたこの歌劇場は、戦災によって破壊されるなど苦難の道を歩みつつも、ミラノ・スカラ座やパリ・オペラ座と並んでヨーロッパ有数の歌劇場の一つとして、幾多の大歌手、大指揮者を迎え、音楽の都ウィーンのシンボルとして生き続けて来た。

劇場内の座席数は1642あるが、その他に567人の立見客も収容できる。内部は他のヨーロッパの劇場と同じく、金と赤の二色で統一され、19世紀のオーストリー・ハンガリー帝国の貴族文化の一端を偲ばせる。また大小のロビーも、ウィーン特産のゴブラン織りで飾られたホールや、各種の大理石を用いたレリーフで囲まれたホールなどがあり、まさしく豪華絢爛といえるであろう。中二階のロビーには歴代音楽監督たちのブロンズ胸像があり、グスタフ・マーラー、ブルーノ・ワルター、カール・ベームと並んでヘルベルト・フォン・カラヤンのものもある。現在のこの

劇場の音楽監督は、アメリカ人指揮者ローリン・マゼールである。

私は1982/83のシーズン（9月から翌年の6月まで）中に、回数にしてほぼ100回の上演に出かけ、34本のオペラと4本のバレエ作品を見た。中にはリヒャルト・シュトラウスの『バラの騎士』や、モーツァルトの『魔笛』のように7回見たものもある。なにしろ三日に一回ぐらいのわりで通っていたので、座席などの切符を買ったことはなく、もっぱら開演の1、2時間前に劇場の窓口に並んで、天井桟敷の立見席（約150円）で見た。私の下宿の小母さんなどは、あきれ顔で、「あなたはウィーン大学にドイツ文学の勉強をしに来たのではなく、ウィーン国立歌劇場にオペラを見に来たのではないか。」と言ったほど、私はどっぷりとオペラに漬ってしまった状態であつたと言えよう。そういう中で、思い出に残る公演もいくつかあるが、ここではウィーンの人々が最も愛する作曲家、ヨーハン・シュトラウスのオペレッタ『こうもり』について少し書いてみることにしたい。

ワルツ王としてすでに功成名遂げた感じのあつたヨーハン・シュトラウスが、オペレッタを作曲してみようと考えたのは、1865年、彼が40才の時であつた。その動機は、当時ウィーンに来ていたオペレッタ王ジャック・オッフエンバックに勧められたからである。ただ、オッフエンバックのほうは、ワルツ王に対するほんのお愛想だったらしいが。それからというもの、シュトラウスはいくつかのオペレッタを書いたが、大した成功作はなかった。その理由としては、良い台本に恵まれなかったからとも言われている。しかし、現在シュトラウスの成功したオペレッタとして残っている『こうもり』、『ジプシー男爵』、『ヴェネチアの一夜』などの台本も、そう高く買える代物ではないが、少なくとも音楽の良さを損わないという程度のものと言えよう。さて、シュトラウスの最初の大ヒット作『こうもり』が、ウィーンのアート・アン・



ウィーン国立歌劇場

デア・ウィーンで初演されたのは、1874年4月であり、オペレッタに関心を持ち出してから、すでに10年の月日が経過していた。余談ながら、私の研究している20世紀初頭のウィーンを代表する作家、フーゴ・フォン・ホフマンスタールがウィーンに生まれたのは、『こうもり』が初演されるおよそ2ヶ月前であった。崩壊寸前の老大国、オーストリー・ハンガリー帝国の文化の一象徴ともいえるオペレッタが初演されたのと、その崩壊に瀕した文化を懸命に担った作家が生まれたのが、ほぼ同じ頃であったということは、必ずしも偶然として片づけられることではないように思える。

『こうもり』の台本は、オッフェンバックに台本を書いていた二人のフランス人作家のものを下敷として、ウィーンの劇場事情によく通じているカール・ハフナーとリヒャルト・ジュネによって大巾に書き改められたものである。内容は19世紀ウィーンの享樂的ムードのうちに繰り広げられる、奇想天外な茶番劇である。

舞台は当時のウィーン。大金持ちの貴族アイゼンシュタインは、美しい妻ロザリンデと、なに不自由ない優雅な生活を送っている。と

ころが、彼が役人に対して、ちょっとした暴行を働いてしまい、今夜から刑務所に入らなくてはならないはめとなり、そのことで弁護士と外出中である。その隙を狙って、ロザリンデの昔の恋人、歌手のアルフレートが図々しく家に入りこんで来て、ロザリンデに迫る。脅したり賺したりして、ようやくアルフレートを家の外へ追い出したロザリンデ。そこへ女中のアデーレがやって来て、自分の伯母さんが急病なので今夜外出させてくれと涙ながらに頼む。だが、実のところは、伯母の病気などというのは真っ赤な嘘、妹のイーダを通して舞踊会の招待状が舞い込んだためなのである。しかし、ロザリンデはアデーレの魂胆など先刻承知で、彼女の泣き落とし戦術など通用しない。そうこうするうちに、弁護士の不手際で拘留期間が延びてしまったと、怒り狂ったアイゼンシュタインが帰って来る。妻の慰めの言葉も何のその、彼の怒りは一向に収まらない。そんな時、彼の友人で、かつて、アイゼンシュタインの悪ふざけの為にこうもりというありがたくない綽名をつけられてしまった、ファルケ博士という男が現れる。彼はアイゼンシュタインに、刑務所へ出頭する前の気晴らしに、オルロフスキー公の舞踊会に行かないかともちかける。妻が座をはずしたのを良いことにアイゼンシュタインは、渡りに船と、この誘いに応じる。ファルケ博士が帰ると、アイゼンシュタインは急に機嫌が良くなり、ロザリンデに不審を抱かせるが、彼女とて夫のいない時を狙って昔の恋人と楽しくやろうと思い、アデーレにも外出を許可する。さも悲しそうに振舞ってはみても、目前に迫った楽しみに、つつい心が踊ってしまう三人の三重唱は、まさにシュトラウスならではの楽しい音楽である。

アイゼンシュタインとアデーレが、気もそぞろに出かけて行くと、アルフレートが現われて一杯やりながら亭主気取りでロザリンデに迫る。当惑しつつも、満更ではないロザリンデ。ところがそこへ刑務所長のフランクが

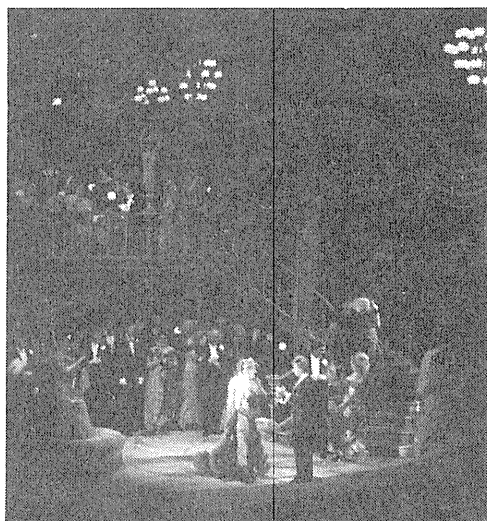
やって来て、アルフレートをアイゼンシュタインと思い込んで連行しようとする。もちろんロザリンデも、ほんとうのことをフランクに言うわけにもいかず、アルフレートが刑務所へと連れていかれてしまうところで一幕が終わる。

第二幕は、ありとあらゆる遊びに退屈し切ったという感じの、オルロフスキー公がホストの舞踏会の場面。ここで、ロザリンデのドレスを着こみ、女優オルガと名のっているアデーレと、フランス貴族と称するアイゼンシュタインがはち合わせ、滑稽なこととなる。そこへフランス人の客として乗り込んで来たのが、誰であろう刑務所長のフランク。このフランクとアイゼンシュタインの二人の偽フランス人の交わす、珍妙なフランス語の会話は大笑をさそう。さらにもう一人、仮面をつけたハンガリー貴族の夫人という女性が出て来る。これこそロザリンデの変装した姿なのであるが、それに少しも気がつかないアイゼンシュタインは、彼女にのぼせ上って大切にしていた時計をまき上げられてしまう。「シャンパンの歌」が高らかに歌われて、舞踏会も最高潮に達した時、12時を告げる時計の音、人々はあわてて帰って行く。

第三幕は刑務所。酔っぱらいの看守フロッシュが、牢の中のアルフレートにからんだり、くだをまいたりして十分に観客を笑わせた後、所長のフランクが千鳥足で帰って来る。そのフランクの後を追うようにして訪ねて来たのは、アデーレとイーダ。アデーレはフランクにパトロンとなってもらい女優になりたいのだと、様々な芸を披露する。その時、刑務所に入りに来たとアイゼンシュタインがやって来たので、アデーレたちは慌てて姿を消す。初めは互にフランス人だと思い込んでいたフランクとアイゼンシュタインの会話は、全くちぐはぐであったが、そのうちに様子がぼんやり二人にも分って来る。フランクが、アイゼンシュタインという男は、昨夜のうちに自分が彼の家へ行き、妻のいる前でつかまえて、

すでに拘置してあると話すと、アイゼンシュタインの心の内に妻に対する疑いの念が起って来る。その折も折、ロザリンデがアルフレートを救い出すため、刑務所にやってくる。弁護士に変装したアイゼンシュタインは、ロザリンデの不貞を責めたて、しまいには変装をかなぐり捨てて正体を現し、ロザリンデに激しくつめ寄る。ところが、ロザリンデも切り札を持っていた。彼女は、オルロフスキー公の舞踏会の時に、アイゼンシュタインからまき上げた時計を取り出して反撃。形勢は一挙に逆転、アイゼンシュタインもたじたじとなる。そこへオルロフスキー公やファルケ博士を初めとする、昨夜の舞踏会の参加者がやって来て、昨夜からの出来事のすべては、ファルケ博士のアイゼンシュタインに対する復讐から出た、悪ふざけであったと種明かしをする。ようやく和解する、アイゼンシュタインとロザリンデ。「シャンパンの歌」の太合唱のうちに幕となる。

私はウィーンでこの『こうもり』を数回、国立歌劇場とウィーン・フォルクス・オペラで見た。その中で一番楽しかったのは、国立



『こうもり』第二幕
オルロフスキー 公爵の舞踏会

歌劇場での大晦日の公演だった。出演者も豪華を極めていたが、とりわけエーディッタ・グルベローヴァのアデーレは絶品だった。それに19世紀ウィーンの倦怠感そのもののようなオルロフスキー公を歌った、ブリギッテ・ファスベルダーの深い美声。エーリヒ・クンツとワルデマール・クメントといった往年の名歌手が演じたフランクとアイゼンシュタインは、声はともかくとして、大晦日の『こうもり』ならではの底抜けの馬鹿騒ぎムードを大いに盛り上げていた。アドリブの連続で普段の上演時間を大巾に過ぎて、11時半ごろ楽しかった舞台も終わった。カーテン・コールの拍手の嵐を背に、国立歌劇場を後にして、地下鉄で下宿に帰った。街の至る所で新年を祝う爆竹の音が鳴り響いていた。12時、下宿のベットにもぐり込んでラジオを聞いていると、新年を告げるアナウンスに続いて、音楽の国にしては平凡なオーストリア国歌、それに続いて『美しき青きドナウ』、やはり、ウィーンはヨーハン・シュトラウスに終わり、ヨーハン・シュトラウスに始まるんだなあ実感したものであった。(ドイツ語)

お知らせ

1. 閲覧証の交付

教養図書館を利用するには閲覧証が必要です。新入生の皆さんには下記の日程で交付します。当日カウンターまで取りに来て下さい。但し、医学部は医学図書館で、看護専門学校は看護専門学校事務室で5月8日以降に交付します。

衛生学部 5月8日(火)

薬学部 5月9日(水)

獣医畜産学部 5月10日(木)

水産学部 5月11日(金)

なお、交付までの間は学生証を使用して下さい。

2. 複写

複写機が FUJI XEROX 4370にかわり、拡大・縮小が出来るようになりました。ご利用下さい。

編集後記

新入生の皆さん、ご入学おめでとうございます。教養図書館ではこの『閲覧ニュース』を年、数回発行しています。毎回、教養部の先生方をお願いして随想等を書いて頂いています。今回は林先生にハイゼンベルク教授の思い出を中心とした紀行、岡野先生にウィーンでのオペラ見物と『こうもり』の紹介をお願いしました。

表紙：イタリアのソンマ・ロンバルドにある別荘の木造階段、フランコ・アルビーニとフランカ・ヘルグの設計

閲覧ニュース42号	1984・4発行	北里大学教養図書館
発行責任者 吾妻寛治	〒228	相模原市北里1-15-1